

■ 書 評

藤 森 聞 一 (編):

固縮と痙縮—その基礎と臨床—

明 石 謙 (川崎医科大学教授, リハビリテーション科)

痙縮とは何か? 固縮とは何か? その発生は? その程度の判定は? 等われわれ素人にはいずれもはっきりしない事ばかりである。ただ関係が無いかという決してそうではなく, 「この痙縮がもっと何とかなったら」等と考えることはよくあり, そのための工夫を種々している。この問題を勉強しようと思い, 成書を2〜3読んでみるとはっきりしない事が大変多く, 普段目にしてるのが痙性麻痺で痙縮とは違うにせよ, 何となく泥沼に足をつこんだような気がする。

「固縮と痙縮—その基礎と臨床」を読んでまず思ったことは, 前述のすっきりしない事がすっきりしたわけではないが, はっきりしたような気がするのである。例えば痙縮と固縮の定義にしても, 数人の執筆者がおのおの自分の考えを述べ, あるいは他の人達の意見を引用しているため, 誰がどう考えているかがわかり, さらに読者が自分の考えをまとめる上に有用な資料を提供してくれる。はっきりしない事については, このような形になっていることが望ましく, 有用なのである。この本はその

ような点で, 大変有益であり, さらに総説的な内容を持つ項も多くあり, 多くの情報が得られ文献を探すのにも大変便利がよい。分析方法にしても多くの方法が書かれており, この方面の研究を始めようとする方達にとって貴重な資料となるであろう。

ただこの本一冊を読むことによりこれらの問題について卒業できるつもりで読むならば失望はまぬがれ得ない。編者もその序で述べているように, この問題は広い分野で魅力的な研究目標であり, まだ今日でも神秘のヴェールに包まれた部分が多いからである。

(B 5 版/頁234/図117/写真7/¥10,000/〒240/医学書院刊)